



2024（令和6）年度

二中だより



第15号 2024（令和6）年7月16日 発行責任者 加賀谷 登

校内人権作文意見発表会及び意見交換会 7月9日（火）5・6校時

7月9日（火）校内人権作文意見発表会及び意見交換会を行いました。各学級の代表となった6名が、それぞれの体験や調べたことから、自分の思いを作文にして発表しました。どの生徒の発表も素晴らしかったです。それぞれが発表した作文を紹介します。



2年2組 西田 柚乃



1年2組 井坂 長門



2年1組 桑田 美羽



3年2組 岡 今日子 マヤ



1年1組 横田 朱音



3年1組 植木 優希菜

無意識のうちに

2年2組 西田 柚乃

皆さんは「女だから」「男だから」「子どもだから」「お年寄りだから」と、無意識のうちに初めから決めつけてしまっているようなことはありませんか。そういう私も、実は、そのように思っていることがあります。

ある日、テレビを見ていると、あるCMが流れてきました。「パイロットになりたい」「ケーキ屋さんになりたい」などの人の夢が流れてきます。でもそのCMには、音もないし、夢を語っている人も映っていません。私は頭の中で子どもの夢かな、これは男の子で、これは女性のセリフだろう、と勝手に想像していました。そう思っていた時に、CMの最後の場面で「あなたは、どんな人の声を想像しましたか」と、映し出されました。これはジェンダー平等を訴えるCMだったのですが、その時私は、自分の中には、無意識のうちに決めつけたりするような考えがあるのだとハッとしました。

私たちの生活の中では、このような決めつけや思い込みがたくさんあるのではないのでしょうか。そして、それは年齢や性別だけではなく、障がいのある方に対してもそうだと思います。どうせできない、と決めつけたりすることはないでしょうか。できないから「かわいそう」だと思っていないでしょうか。そう思ったことがないと言う人もいるかもしれませんが、私もそうでしたが、振り返ってみると、私にも決めつけをしてしまっていたことがありました。

私の姉は実は障がいをもって生まれました。でも運動も勉強も家事も誰よりも頑張っていて、今では不器用ながらもなんでもできます。将来の夢だってしっかり持っています。そんな姉は、一つ一つ頑張っているけど、思ったことが、すぐには上手にできないこともあります。私はこれまで、姉のそのような姿を見て、「かわいそう」と思い、これ以上は無理だと限界を決めつけていたのだと思います。

また、私は以前に車椅子にのった方を見かけたことがあります。その時、とっさに、「かわいそう」と思いました。歩けないから、走れないからと思ったからです。そのことを当時の担任の先生に話すと、「そんなことを言うてはだめ、理由は自分で考えなさい」と言われたことがあります。今振り返ってみると、「かわいそ

→ 裏面に続く

う」という言葉は、障がい者の方は「不幸」「何もできない」と勝手に決めつけていたのだと思います。ヘレンケラーの言葉の中に「障がい者は不幸ではない不便なだけだ。」という言葉があります。確かに、耳が聞こえなくても、目が見えなくても、手や足が思うように動かなくても、できることはたくさんあります。私の姉も毎日、いろんなことに挑戦し、とても楽しそうに、生活をしています。

障がい者は「不幸」なのでしょうか。「かわいそう」なのでしょうか。毎日、精一杯生きている、他の人たちと何も変わらないと思います。もし、障がいをもっている私の姉が不幸であるならば、それは「障がいがあるからできない、かわいそう」と決めつけられることだと思います。

私たちは、今後、将来への希望や夢をもって生きていくと思います。そのことに対して「無理だ」などと決めつけられたら、とても嫌だと思いますが、それは障がい者も同じということです。

私の心の中には、無意識のうちにそのように思ったりすることがあります。それが、他人を傷つけてしまったり、不幸にしてしまったりすることがあるので、私は今後、もっと相手のことを知ったり、考えたり、共感することができるように心がけたいと思います。自分も、他人も傷つけないように、自分の中にある「無意識」を見つめ直し、みんなが幸せに生きていけるようにしたいです。

ぼくのこと

1年2組 井坂 長門

ぼくが差別された理由はアトピー性皮膚炎です。それはなぜかということ、ぼくが3年生の時に水泳の体験に行ったら、急に後ろにいた同じ年齢ぐらいの男の子に「体きたないね」と言われました。ぼくはその事を言われた理由が分からなかったけど、今なら分かります。その理由はアトピー性皮膚炎のせいで体がかさぶたなどでボロボロになっていたからです。それを知った時はすごく腹が立ちました。なんでそんなことを言うのだろうと怒りで一日が過ぎました。その嫌なことを言われた二日後ぐらいに、ぼくは皮膚科に行きました。飲み薬、塗り薬を皮膚科の先生からもらいました。その薬を塗ったり、飲んだりしていると、だんだん体の傷がなくなっていきました。

でもプールでは、その嫌なことを言ってきた人がいます。だから嫌だなあと思っていたけど、どうやらその子は傷が嫌だっただけで普通にしゃべりかけてきました。でも正直ぼくには、嫌なことを言ってきたことは変わらないので、あまり仲良くはしたくなかったのですが、その子は普通にしゃべりかけてくるので、しかたなくしゃべっていました。でも、もうがまんならないと思って、ぼくはこう言いました。「ぼくと最初に会った時、何て言ったか覚えてる」と言ったら、その子は「何だっけ」とふざけながら言いました。本当に腹が立ったので、ぼくは水泳を習っている間は、その子としゃべることはなくなりました。

でもぼくは一つ疑問に思いました。なぜそのようなことが言えるのか気になりました。自分なりに考えて思ったことは、正直、その言ってきた子は、性格が悪いと思いました。その理由は、普通だったらそんな肌が汚いぐらいじゃ、そんなこと言わないと思うからです。だからぼくは腹が立ったので言い返そうとしたけど、僕にそんな勇気はありませんでした。けれど、ある日突然嫌なことを言ってきた子が「長門君、ごめん」と言ってきてびっくりしました。ぼくは一瞬思考が停止しました。その子がごめんと言ってきた理由がぼくと最初に会った時、何と言ったか思い出したからだそうです。それを聞いた瞬間、ぼくはうれしくなりました。性格が悪い子だと思っていた自分がばかのようなのでした。でも世の中には、全く謝りもしないような人がたくさんいるのも事実です。そう思ったらすごく悲しいです。もしも、ほとんどの人が何か犯罪を犯しても、何も謝罪しない人だったら、この世の中は戦争がたくさん発生すると思います。国と国を巻き込んだ事件が起きても、どちらの国も謝罪しなければ、やがてはほぼ確実に戦争に発展してしまうのではないのでしょうか。だからぼくは、病気だからとか、コロナに感染したとか、生活が苦しいとかで差別することは許されないと思います。なぜなら人は平等だからです。ニュースとかで流れてくるいじめや差別は、本当に大嫌いです。

あともう一つ思ったのは、なぜ僕と同級生の子たちは、肌が汚いなどの嫌なことを言わないのだからかと思いました。普通ならプールにいた子のように「君は汚いね」などと言うはずだけど、同級生のみんなは逆に「大丈夫」と言ってくれる子が多数でした。「大丈夫」と聞いてくれる皆はすごく優しいと思いました。だから何か病気や障がいがあっても、皆みたいに心配してくれることはすごくいいことだと思います。この世の中が優しい人だらけになって、差別やいじめ、戦争がなくなって平和な世界になることが僕の理想です。しかし、そんな世界になるのには、すごく時間がかかります。だからみなさん、僕たちのできる最大限のことをしてみませんか。たとえば、いじめや差別をしている人を注意したりすることです。そして、それを続けていじめや差別をなくしていきましょう。

※ 他の方は、次号以降で紹介します。